

[原著]

理学療法学専攻における初年次教育の取り組み（Ⅱ） ～合宿型セミナーの試み～

鈴木 誠¹⁾ 西山 徹¹⁾ 高橋 純平¹⁾
本間 里美¹⁾ 藤澤 宏幸¹⁾ 古林 俊晃¹⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科理学療法学専攻

要旨

理学療法学専攻では平成 22 年度より初年次教育として、入学前ガイダンス、サマーセミナーおよび朝食勉強会を企画し、新入生の円滑な大学教育支援を展開してきた。本報では、これまでに計 3 回にわたって実施されたサマーセミナー（以下、セミナー）について報告をする。セミナーは、情意領域の育成や学習習慣の定着を図ることを目的に、グループディスカッションや基礎医学系科目の復習、幼児との交流会などを行った。参加者へのアンケート結果からは、プラスの行動変化を読み取ることが出来、一定の教育効果があったといえる。また、セミナーで意識化された情意面の変化や学習への取り組み姿勢が半年経過した時点においても継続されており、教育効果としても一定の成果があったと考えられる。今後は、より一層の活動内容の充実とともに微増傾向にある参加者のさらなる増加を促し、プラスの効果を一人でも多くの新生に波及させたいと考えている。

【キーワード】初年次教育・情意教育・内発的動機づけ

1. はじめに

高等教育進学率が 5 割を超えユニバーサル化が急速な勢いで進行している昨今、学士課程教育の充実は多くの大学にとって重要な課題であると言える^{1,2)}。

一方で、卒後の目的が明確になっている理学療法士養成校の受験生の中には目指すべき将来像を十分に描けないまま進路を選択する者が少なくない。また、近年著しく高度に専門性が進んだ理学療法において、専攻する学生の一部には内発的動機づけが乏しいことから、養成校の授業スケジュールについて行けなくなる者も散見される。内発的動機づけとは、「学習者自身

の持つ興味、要求、知的好奇心、自覚などにより、自発的、主体的に学習が行われる場合であり、動機づけの契機となるものが主として学習者の内部の要因に存する」³⁾とされており、ここ数年散見される学生の問題に対し、支援が急務であると言える。

このような観点から、理学療法学専攻では新生が大学入学後の円滑なスタートのため様々な支援を試みてきた⁴⁾。中でも「サマーセミナー」は、集団生活を基本とした合宿型のセミナーであり、参加者の主体的な学習への取り組みやコミュニケーション能力など情意領域の育成の場として位置付けている。

そこで本論では、サマーセミナー（以下、セミナー）のこれまでの取り組みを紹介すると共に、今後の新たな方策を検討することを目的とした。

Ⅱ. 概要

本学は岩手県久慈市に関連施設である久慈キャンパスを有し、そこを拠点にセミナーを実施した。実施期間は例年9月上旬の夏季休業期間を利用し、3泊4日の日程で行った。参加者は理学療法学専攻1年次生の希望者であり、これまで在籍者の半数以上がセミナーに参加した（表1）。また、前期の学習経過から教育的支援が必要と考えられる学生の参加率は例年約70%程度であった。

セミナーの企画運営は教員主体の初年次教育ワーキンググループが中心となり、1年生担当教員（Student Adviser:SA）や学生リーダー（理学療法学専攻2年次生で前年度のセミナー参加者）数名の協力を得た。

Ⅲ. 目的

セミナーの目的は大きく分けて2つに区分できる。第一の目的は、参加者の情意領域の育成を図ることである。学生は将来理学療法士として活躍する以前に、組織や社会を形成する一人の大人として態度や守るべき規範、コミュニケーション能力を学生のうちに備えておく必要がある。それをここでは「情意領域」と定義する。

情意領域の成長は集団生活を通じて他者との関わりを持ちながら育つものであり、セミナーでの共同生活で相互に高めあうことを狙いとした。第二の目的は、参加者の学習習慣の定着を図ることである。1年次での学習のつまづきは、その後続く専門科目の理解に大きく影響を及ぼすことが予想される。そこで、1年次前期で学んだ基礎医学系科目の復習を通じて自己学習の仕方を学び、能動的で自立的な学習姿勢への転換を狙いとしている。

Ⅳ. 活動内容

例年セミナーの活動内容は前期科目の復習を中心とした活動（以下、学習活動）と他者との交流を中心とした活動（以下、集団活動）の大きく2つに区分できる。以下に各活動内容の一部を紹介する。

1) 学習活動

①学習会

参加者の内発的動機づけを高めることを目的として、講義及びグループディスカッションを行った。講義は、理学療法士数名（1年SA）がこれまでの臨床から得た経験談を講話するような形式をとった。それを受けて参加者は1チーム5名程度で構成したグループ内で「理学療法士にはどんな能力が必要か？」というテーマに基づいて討論を行った。その討論から得られた結論をグループ内で集約し、発表を行った。

表1. セミナー参加者の推移

	参加者	参加率*
平成22年度	46名(男性:20名,女性26名)	56.8%
平成23年度	50名(男性:32名,女性18名)	58.1%
平成24年度	51名(男性:15名,女性36名)	58.6%

*:理学療法学専攻1年次在籍者に対するセミナー参加者の割合

続いて、基礎医学系科目の中でも前期科目の復習として解剖学の理解を促すための講義及び体表解剖実習を実施した。講義では、参加者が教科書や資料を用いながら学習方法を学び、教員は個別に疑問点に対しての解答の導き方や教科書の使用方法についてアドバイスを行った。また、過去に理学療法士国家試験で出題された解剖学の問題を利用し、学生同士お互いの力で問題解決できるよう答えを導く手順について教員がアドバイスを行った。このような関わりから、能動的で自立的な学習姿勢への意識付けを行い、あわせて学生全体が早期に陥りやすい学習上の問題に早期に対処した。

②後期の橋渡しガイダンス

後期に開講される専門基礎科目（生理学）と前期科目との関連性についてガイダンスを行い、科目相互のつながりを意識させることを狙いとして実施した。加えて、参加教員の専門とする理学療法領域について参加者が聴講する機会を設けた。参加者はそれぞれの領域で求められる具体的な知識や技術を提示されたことで、これまでの学習の重要性を再認識すると同時に、今後の具体的な目標設定を行う機会とした。

2) 集団活動

①幼児との交流

情意領域の育成機会の一つとして、キャンパスに併設されている幼稚園の全面的な協力を得て、園児らと交流会（共同での創作活動やレクリエーション活動）を行った。ここでは、普段接することが少ない幼児との交流を通じて他者への適切な言動や傾聴姿勢を育むことなど柔軟なコミュニケーション能力の育成を狙いとした。この地域は高年齢化が進み、青年層人口率が低い傾向にある。その中で、幼児に対する大学生の存在や果たす役割は大きく、それを事前に十分に教員が説明を行った。

②Cinemeducation

Alexander ら⁵⁾によって紹介されているCinemeducationという手法を用いて、医療人としての使命感や倫理観の育成を促すことを目的に行った。これは、医療現場をモチーフとした映画の1シーンを鑑賞し、その内容についてグループ内で意見を述べ合い発表してもらった。ここでは、様々な意見を述べ合うことで医療に対する新たな自己の価値観を見出すことを狙いとした。

③グループでの創作活動

情意領域の育成の機会の一つとして、少人数グループでの創作活動を行った。創作活動のテーマをセミナー初日に各グループで設定し、最終日にその成果の発表を行った。これは、参加者同士が課題達成に向けた協同作業を通じて、コミュニケーション能力や調整力、社会性を育むことを狙いとした。

V.活動成果の検証

筆者らはこれまでセミナー参加者の学習成績や態度、情意領域に変化がみられたのか、それがどの程度持続されているのかを調査・報告^{6,7,8)}してきた。そこで今回、平成22年度から24年度の計3回にわたって実施された調査とその結果について紹介する。

1) 後期授業成績による検証

平成22年度のセミナーでは参加者の学習活動の成果を後期授業科目の成績を用いて検証を行った。検証には後期授業科目の一部(解剖学、身体運動学演習、理学療法評価技術学演習I、生理学I)を用い、小テストや中間試験の結果をセミナー参加者と不参加者とで比較した。検定には2標本t検定を用いた。有意水準はいずれも5%未満とした。

2) Profile of Mood States を用いた検証

平成 23 年度及び平成 24 年度には、参加者のセミナー前後での感情の変化を調査するため、質問紙表検査（日本語版 Profile of Mood States, 以下、POMS）を用いて実施した。この検査は、対象者がおかれた状況下の一時的な気分や感情の状態を評価する気分プロフィール検査であり、「緊張 - 不安」、「抑うつ - 落ち込み度」、「怒り - 敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」の 6 つの気分尺度で判定した。検査はセミナー開始直前及び終了直後に参加者全員に実施した。検査にあたり、調査の趣旨を参加者全員に説明し、同意を得た上で実施した。検査結果は性別ごとに、セミナー前後で 6 つの尺度をそれぞれウィルコクソンの符号順位検定で施した。有意水準はいずれも 5%未満とした。

3) アンケート調査による検証

平成 24 年度には、セミナー参加による行動変容がどの程度持続されているかを検証するため、セミナー終了後より約半年経過した時点でアンケート調査を行った。アンケート内容は、独自に作成したものであり、セミナー参加後の行動変容を具体的に聴取する内容とした。回答は無記名とし、個人が特定されないように配慮した。設問は、現在の学習への取り組みや生活習慣、他者に接する際の心構え、交友関係や学習方法に関する内容について聴取した。また、セミナーで学んだことについて自由記載欄を設

け、その事項が現在でも継続して活かされているかを聴取した。

VI.結果

1) 後期授業成績

結果を表 2 に示す。全ての後期授業科目において、セミナー参加者の小テストや中間試験の得点が不参加者に比べ有意に高値を示した。

2) POMS

平成 23 年度及び平成 24 年度のセミナー開始前及び終了直後の平均値（表 3, 表 4）及び標準化得点の結果を図 1, 図 2 に示す。全体の傾向として、「緊張 - 不安」「抑うつ - 落ち込み感」「怒り - 敵意」および「混乱」といった陰性因子が減少し、「活気」を示す陽性因子が増加した。陰性因子の尺度では、どの年度においてもセミナー参加によって有意な減少が見られた ($p < 0.01$)。一方、陽性因子としての「活気」では、どの年度においても有意な増加がみられた ($p < 0.05$)。「疲労」については年度ごとに傾向が異なる結果となった。性別で見ると男子学生群では、セミナー参加前に比べ陰性因子は概ね減少を示したが、陽性因子としての「活気」には有意差が見られなかった。一方で女子学生群では、セミナー参加前に比べ陰性因子は減少し、陽性因子としての「活気」は有意な増加を示した ($p < 0.01$)。

表 2. 平成 22 年度 セミナー参加者と不参加者の成績比較

	身体運動学演習		理学療法評価技術演習 I		解剖学	生理学 I	
	初期試験	中間試験	小テスト	中間筆記試験	小テスト	中間試験	
参加群	人数	47	47	47	47	47	47
	平均点	53.3	50.5	69.2	76.8	81.4	67.1
	標準偏差	13.5	13.3	13.5	10.4	9.5	14.7
不参加群	人数	28	27	29	29	30	28
	平均点	44.5	42.9	59.5	69.9	77.7	60.6
	標準偏差	15.4	11.9	17.8	14.5	15.5	12.3
		*	*	**	*		*

** p<0.01
* p<0.05

表3. 平成23年度 セミナー開始前及び終了直後のPOMSの結果

	緊張・不安		抑うつ・落ち込み		怒り・敵意		活気		疲労		混乱	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
女性(平均)	44.0	39.8	47.5	43.0	42.6	38.9	52.8	57.4	43.8	44.2	49.0	41.1
SD	7.8	4.9	6.4	4.8	4.5	2.7	12.6	11.6	8.5	7.2	8.4	5.6
男性(平均)	51.1	42.6	54.2	45.8	48.4	41.1	50.2	54.3	50.8	48.0	54.5	43.9
SD	11.5	8.8	10.8	7.0	10.1	4.9	11.1	11.1	10.3	9.3	12.0	8.3
全員(平均)	48.6	41.6	51.9	44.8	46.4	40.3	51.1	55.4	48.4	46.6	52.6	42.9
SD	10.8	7.7	10.0	6.4	8.9	4.3	11.6	11.2	10.2	8.7	11.1	7.6

SD:標準偏差、前:セミナー開始前、後:セミナー終了直後

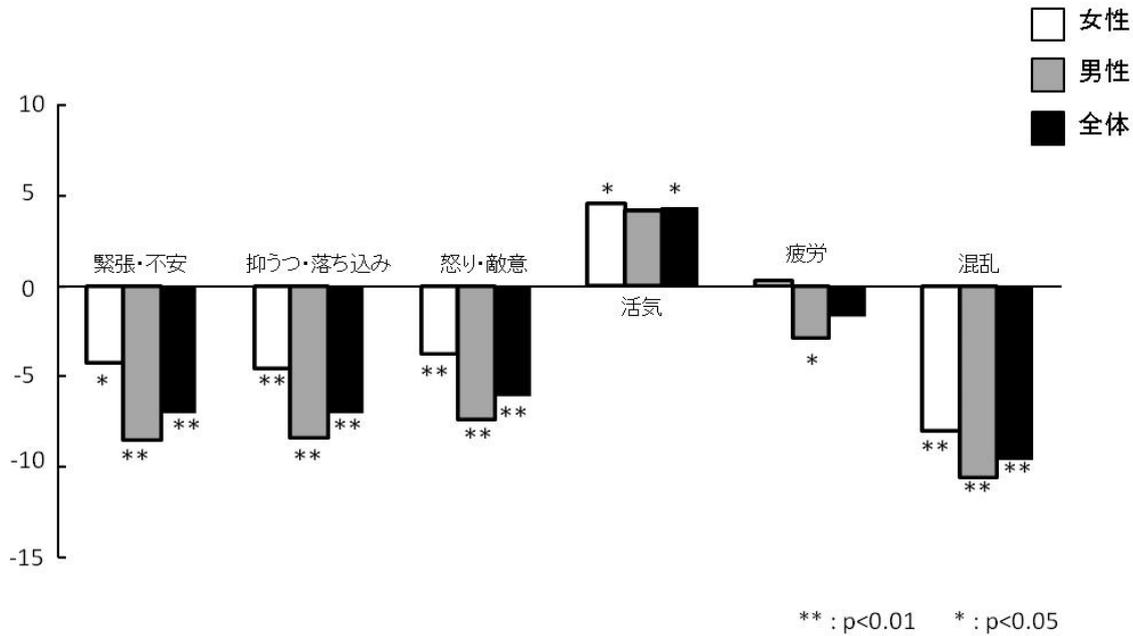


図1. 平成23年度 POMSによるセミナー後の気分の変化

表4. 平成24年度 セミナー開始前及び終了直後のPOMSの結果

	緊張・不安		抑うつ・落ち込み		怒り・敵意		活気		疲労		混乱	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
女性(平均)	48.5	44.4	52.1	45.7	46.0	43.9	51.0	56.7	47.3	46.5	50.9	45.9
SD	9.1	7.9	10.1	7.7	8.5	9.0	9.2	11.5	9.6	10.4	10.9	8.8
男性(平均)	50.8	44.1	55.0	49.1	50.2	42.4	50.2	52.7	50.9	53.9	50.6	49.7
SD	10.0	9.3	14.1	8.6	14.0	7.1	9.3	10.9	14.1	9.7	11.2	11.4
全員(平均)	49.2	44.3	52.9	46.7	47.3	43.5	50.8	55.6	48.3	48.7	50.8	47.0
SD	9.4	8.2	11.4	8.0	10.5	8.4	9.1	11.4	11.1	10.7	10.9	9.7

n=51

SD:標準偏差、前:セミナー開始前、後:セミナー終了直後

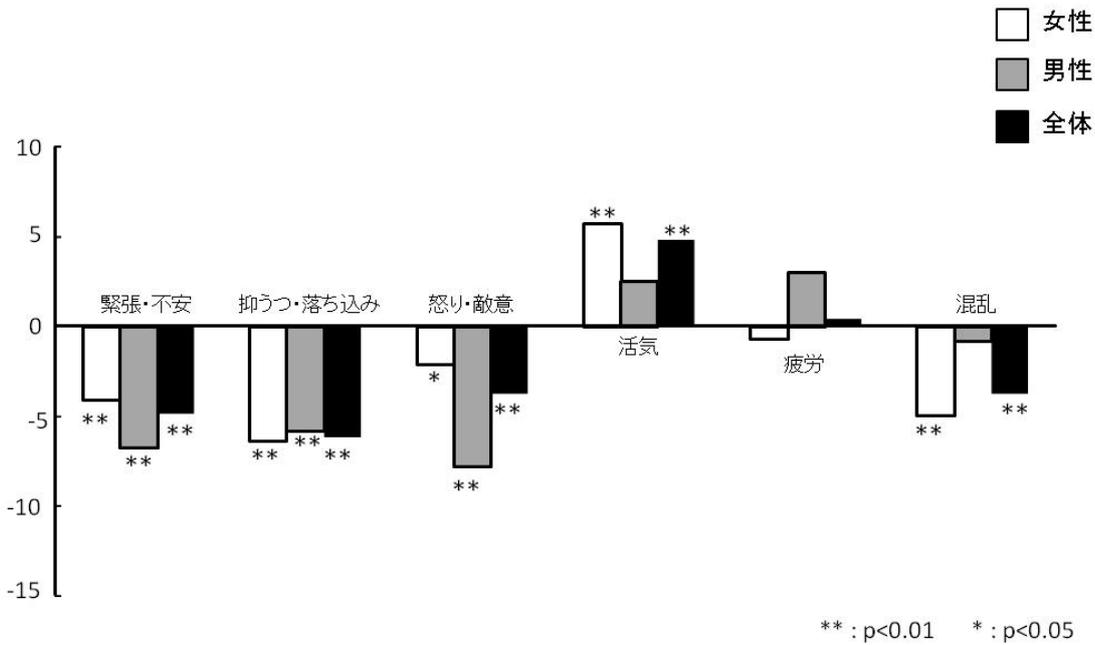


図2. 平成24年度 POMSによるセミナー後の気分の変化

3) セミナー半年後のアンケート

平成 24 年度のセミナーで実施したアンケート結果を図 3 に示す。アンケートは 45 名 (88.2%) から回答を得た。セミナー参加後の学習への取り組み姿勢や生活習慣、情意領域の意識については、大半の参加者が 6 ヶ月経過した時点でも継続しているという回答であった (学習への取り組み:91.1%、生活習慣:64.4%、他者に接する心構え:91.1%)。

また、交友関係がセミナーをきっかけに広がった者が 44 名 (97.8%) であった。セミナーで特に学んだことは、「勉強方法」や「他者との接し方やグループでの協力」、「自ら考え行動する (意見を述べる)」という内容が多く意見として挙げられ、そのことは普段の日常生活でも活かされているという回答が大半であった (36 名、80.0%)。一方で、セミナーにより改善された生活習慣が実施前に戻るような傾向も見られた。

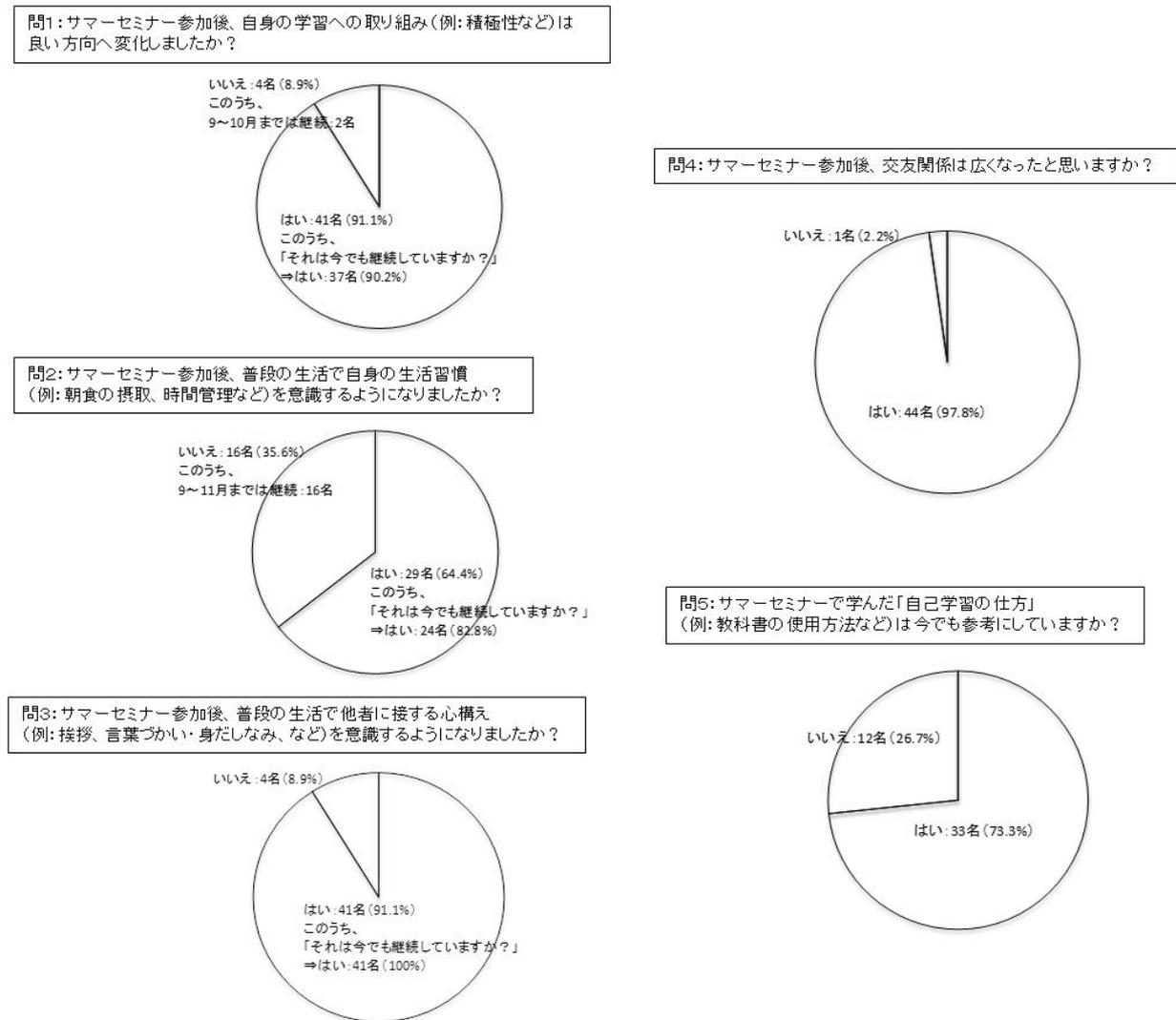


図3. 平成24年度 セミナー半年経過後のアンケート結果

Ⅶ. 考察

今回のセミナーの学習活動の成果として、参加者の成績が有意に高い値を示した。これは、前期の学業成績が良好で目的意識の高い学生がセミナーに参加していたという可能性もあり、事前の調査がないことから一概にセミナーの効果とは断定出来ない。しかし、参加者が不参加者よりも成績が高値を示したことは興味深く、今後の1年次生への参加の促し（特に教育的支援を必要とする学生）や企画内容の検討に大いに参考になる結果であると考えられる。セミナー参加者からは学習面での意欲の向上や学習方法の改善といった声が例年アンケート結果の中で多く聞かれる。特に、セミナーを通じて「教科書の使い方が分かった」という声は毎年多く聞かれる感想の一つである。大学での学びは自学自習によって疑問を解決していくことが強く求められることは言うまでもない。大学で初めて学ぶ領域については、導入からつまづくことなく習得出来るよう、自己学習の方法を早期に確立することも円滑な理解には必要である。また、セミナー開催の時期が後期授業開始の直前であり、このタイミングで改めて学習姿勢を見つめ直す機会があることは、今後の将来像（理学療法士像）を描いていく上でも大変意義深い時間であったと考えられる。

POMS を用いたセミナー前後の気分や感情の変化の結果から、全体として「活気」のような陽性因子は上昇し、「緊張 - 不安」のような陰性因子は減少する傾向が見られた。この傾向は、過去のセミナー間で比較してもほぼ同様であった^{6,7,8}。男子学生においては、セミナー参加前に比べ陽性因子としての「活気」には差が見られなかった。一方で女子学生では、陽性因子は有意に増加した。今回のような宿泊型研修においては、女子学生群の方がよりグループワークや集団活動を通じて充実した時間を過ごすことが出来た結果ではないかと考えられる。「疲労」に関する結果については、例年プログラム内容

やセミナー期間中の気象条件（天候・気温など）等が影響し、一定の傾向が得られなかったと考えられる。ただ、ここ数年においては「疲労」の値に大きな変化を示さず推移していることから、各企画の内容や時間設定など参加者にとって適切であり、今後のセミナー運営の参考にしていきたい。

毎回セミナーでは情意領域の育成としてグループでの創作活動や園児との交流会といった他者との関わりの機会を多く企画している。その背景には、コミュニケーション能力の不足を一例とする情意領域の問題がその後の学生生活（臨床実習など）に大きく影響しかねないと考えているからである。集団生活が大半を占める今回のような宿泊型セミナーでは、教員や2年生の学生リーダー、幼児やその保護者、関係職員など様々な年齢や立場の異なる方々との関わりが必然的に多くなることから、柔軟なコミュニケーション能力が求められる。このことは、参加者の情意領域の育成には絶好の機会であると言える。特に、参加者が普段接する機会の少ない幼児との交流は接し方や話し方などの対人スキルを十分意識しなければならず、大変有意義な時間であると感じている。実際に参加者からは、「幼児にあわせて言葉の使い方や接し方を意識できるようになった」や「幼児の手本となれるような振る舞いや身だしなみが実践できた」など、情意面の成長のきっかけを感じさせる声が多く聞かれた。また、半年経過した時点においても少なからず情意領域や学習への取り組み姿勢が意識されており、持続的な教育効果としても一定の成果があったと言える。ある参加者の例として、「セミナーに参加したことで授業に興味湧き、図書館で勉強するようになった結果仲間が増えた」という感想が聞かれた。セミナーで得た経験がその後の参加者の行動変容に少なからず影響を与えたことは大変意義深いことであると考えている。一方で、セミナーによって改善された生活習慣が以前のように戻

ったという参加者もあり(35.6%)、今後学内での対策を講じる必要がある。

今後はより一層の活動内容の充実とともに、毎年在籍者の60%程度にとどまる参加者の更なる増加を促し、大学生活全般にわたるプラスの効果を一人でも多くの1年次生に波及させていきたいと考えている。

VIII.まとめ

我々はこれまで計3回にわたり、1年次生の学習姿勢及び情意領域の育成に主眼を置いた合宿型セミナーを実施してきた。結果、参加者の成績の上昇が見られ、プラスの行動変化についてもセミナー終了後のアンケート結果などから読み取ることが出来、一定の教育効果があったと考えている。また、セミナーで得られたプラスの行動変化は半年経過した時点でも参加者に少なからず影響を与えていたことは大変興味深い。総じて、合宿型セミナーでのさまざまな体験が参加者の心の成長を促し、学生生活へも反映されていることが伺える。今後も理学療法学専攻では初年次教育の一環として合宿型セミナーを継続していきたいと考えている。

IX.謝辞

本企画の開催にあたり、大学関係者並びに理学療法学専攻教員の皆様には多大なるご支援を頂いた。記して謝意を示す。

X.引用文献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(審議まとめ)」平成24年3月26日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm
- 2) 文部科学省 中央教育審議会 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」平成20年

12月24日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm

- 3) 半澤恒彦, 野呂正, 松井匡治, 野呂アイ, 佐藤寿郎: 教育心理学: 発達疫学研究所出版部 1990; pp44-70.
- 4) 藤澤宏幸, 西山徹, 本間里美, 高橋純平, 小林武, 黒後裕彦: 初年次からのコミュニケーション能力開発. 東北理学療法研究. 2012. 10: 31-34.
- 5) Alexander M, Hall MN, Pettice YJ: Cinemeducation: an innovative approach to teaching psychosocial medical care. Fam Med. 1994 Jul-Aug;26(7):430-3.
- 6) 鈴木誠, 古林俊晃, 小林武: 平成22年度東北文化学園大学教育計画支援費助成活動報告書「久慈キャンパスにおける3泊4日のサマーセミナーの実践」. 2010.
- 7) 鈴木誠, 西山徹, 本間里美, 古林俊晃: 平成23年度東北文化学園大学教育計画支援費助成活動報告書「久慈キャンパスにおけるサマーセミナーの実践」. 2011.
- 8) 鈴木誠, 古林俊晃, 西山徹, 高橋純平, 本間里美, 藤澤宏幸: 平成24年度理学療法学専攻における初年次教育の取り組み「久慈キャンパスにおけるサマーセミナーの実践」実践成果報告書. 2012.

Initiative for education for new students in the Department of Physical Therapy
(II): Trial of a residential seminar

Makoto Suzuki¹⁾, Toru Nishiyama¹⁾, Junpei Takahashi¹⁾, Satomi Honma¹⁾,
Hiroyuki Fujisawa¹⁾, Toshiaki Furubayashi¹⁾

1) Physical Therapy Course, Department of Rehabilitation, Faculty of Medical
Science and Welfare, Tohoku Bunka Gakuen University

Abstract

In our department, pre-entry guidance, a summer seminar and breakfast study meetings have been designed as part of the first-year education since 2010, in order to develop smooth education support for first-year students. This report focuses on the summer seminar, which has previously been held a total of 3 times. The aims of the seminar are to develop the emotional domain and establish study habits, and the seminar includes group discussions, revision of basic medical subjects and an interactive session with young children. The results of participant questionnaires suggest positive behavior changes, and a certain degree of educational effectiveness. Furthermore, emotional changes, and attitudes to studying made conscious during the seminar were sustained 6 months after the seminar, suggesting a degree of educational effectiveness. Future research should aim to further enrich the content of activities to encourage an increase in the slightly upward trend of participants, so that the positive effects can be extended to even more first-year students.

【Keywords】

First-year education, emotional education, intrinsic motivation